要註　現代詩精選　目次

凡例……一
大正・昭和詩史……七

作品大正篇

北原白秋　邪宗門秘曲　絲車　片恋……二八
三木露風　去りゆく五月の詩　沼のほとり　現身……三一
石川啄木　はてしなき議論の後（二）　飛行機……三八
木下杢太郎　金粉酒　該里酒……四一
川路柳虹　海と嬰児……四四
高村光太郎　根付の国　秋の祈　傷をなめる獅子……四六
日夏耿之介　道士月夜の旅……五三
野口米次郎　船頭　帰去来賦……五六
河井酔茗　球根……五八
福士幸次郎　鍛冶屋のばかんさん……六〇
白鳥省吾　種蒔人　真昼……六三
百田宗治　味噌汁　蝶……六四
山村暮鳥　譫語　憂鬱な大起重機の詩　春の河（一）　雲……六五
萩原朔太郎　猫　艶めかしい墓場　小出新道……七〇
室生犀星　小景異情（その二）　寂しい春　靴下　象……七四
大手拓次　あをい狐　香料の顔寄せ……七八
千家元麿　自分は見た　秘密……七九
佐藤惣之助　宵夏　わが家の下婢……八三
佐藤春夫　春のをとめ　望郷五月歌……八四
堀口大学　獅子宮　冬日抄……八九
西条八十　蠟人形……九一
高橋新吉　皿　蠅……九三
平戸廉吉　飛鳥……九五

萩原恭次郎　墓場だ　墓場だ……九七

作品昭和篇

西脇順三郎　太陽　旅人かへらず……一〇三
北園克衛　黒い距離……一〇四
安西冬衛　韃靼海峡と蝶　春……一〇七
三好達治　草の上　甃のうへ……一〇九
竹中郁　ラグビー……一一三
村野四郎　体操　黒い歌……一一七
北川冬彦　ハードル・レース　戦争　馬　雑草……一二〇
中野重治　歌　夜明け前のさようなら……一二一
植村諦　蠅……一二六
壺井繁治　星と枯草……一二七
岡本潤　石ころ……一二八
小野十三郎　明日　早春……一三〇
金子光晴　燈台（一）　五つの湖……一三三
丸山薫　離愁　砲墨……一三七
津村信夫　小扇……一三九
伊東静雄　冷たい場所で……一四〇
田中冬二　海の見える石段　山鳴……一四一
深尾須磨子　枝の祭……一四三
永瀬清子　諸国の天女……一四四
草野心平　蛇祭り行進　秋の夜の会話　月夜……一四七
宮沢賢治　春と修羅　岩手山　雨ニモマケズ……一五二
八木重吉　素朴な琴　父……一五八
大江満雄　メーデーの写生　古い機織部屋……一五九
尾形亀之助　煙草は私の旅びとである……一六二
山之口貘　結婚……一六四
逸見猶吉　報告（ウルトラマリン第一）……一六五
吉田一穂　海郷　母……一六八

伊藤整　忍路……一七〇
大木実　曇った日の夕方……一七一
高見順　天……一七二
池田克己　東京第四番……一七三

詩論篇

現代の詩　島村抱月……一七八
詩の本質　萩原朔太郎……一八一
美について　高村光太郎……一八九
超自然詩学派　西脇順三郎……一九二
新散文詩への道　北川冬彦……一九七
詩の音楽性について　村野四郎……二〇〇
詩の鑑賞（中原中也・立原道造）　三好達治……二〇七
詩論　小野十三郎……二二
大正・昭和詩年表……二二五

大正・昭和詩史

一　大正時代

詩は舞踏で、散文は歩行であると云われるように、詩では内容と形式とが一体となっていて、従って内容上の分類も詩では困難であるが、その大体の傾向から、大正の詩もある程度の流派の分類やその展開を考えることは出来る。

大正の詩は象徴主義と自然主義との継続・反撥・屈折・離反等の展開として一応考えられる。象徴主義の詩は『海潮音』や有明、泣菫の詩業によって展開したが、更に永井荷風訳の『珊瑚集』（大正二）によって大いに屈折、変移したのである。北原白秋、三木露風、木下杢太郎等がどのようにその影響を受けたかはここに詳説し得ないが、（矢野峰人「海潮音の影響」岡崎義恵「珊瑚集の影響」参照）それらの西欧詩の感化のうちにも、また日本的、東洋的な文学伝統との混融が見られた。例えば、北原白秋の『邪宗門』の中心の主題にしても、西欧的なキリスト教とその文化ではなくて、日本渡来の文物の異国情調として取上げられ、その『思ひ出』には伝統的な歌謡の内容、形式の近代化が見られる。露風には珊瑚集との関係が深いが、「現身」における芭蕉連句の影響、更に『幻の田園』序において、日本の伝統としての象徴の精神に居ることを喜ぶと述べている。また杢太郎の南蛮趣味や江戸情調も近代的な坐標に立っての、伝統への回顧と批判であった。

そしらぬ風に息をのんだ。

（『第百階級』）

○みやざわ・けんじ――明治二十九年―昭和八年（1896―1933）岩手県生。盛岡高等農林学校卒業。在学中より短歌・童話を創作。農村改造を実現の為、農耕に従事、農業に尽した。主要詩集『春と修羅』『宮沢賢治全集』七巻がある。三十八歳で歿。

宮沢賢治

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの陥曲模様
（正午の管楽よりもしげく
琥珀のかけらがそそぐとき）
いかりのにがさまた青さ
四月の氣層のひかりの底を
唾し　はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ
（風景はなみだにゆすれ）
砕ける雲の眼路をかぎり
れいろうの天の海には
聖玻璃の風が行き交ひ
ZYPRESSEN　春のいちれつ
くろぐろと光素を吸へば
その暗い脚並からは
天山の雪の稜さへひかるのに
（かげろふの波と白い偏光）
まことのことばはうしなはれ
雲はちぎれてそらをとぶ
ああかがやきの四月の底を
はぎしり燃えてゆききする
おれはひとりの修羅なのだ

○「修羅」――阿修羅の略。六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の一。非天・非類・不端致と訳す。我慢勝他の心。猜疑嫉妬の念盛んに、戦闘を好む鬼神。

○'mental sketch modified' 修飾したる心象スケッチの意。

○心象のはいいろはがね――灰色鋼で堅固な精神。

○『あけび』――山野に自生する蔓性灌木。

○韶曲――自分の意思を曲げて人にこびへつらうこと。

○琥珀のかけら――陽光。

○はぎしり――自己の意思に反して堅固な精神がおぼれ、熱っぽい情意が燃えあがるからである。

○聖玻璃――作者独特の用語。玻璃はガラスの意。

○ZYPRESSEN――檜。

○『光素』――エーテル、光エーテルのこと。

○『偏光』――自然光に対しての偏光。光ヴェクトルの振動方向が限定されている光のこと。